

沢の焚火



胆振西部医師会
なかむら整形外科クリニック

中村 一孝

日高の沢で盛大な焚火をしたいとずっと思っていた。しかし、その途中の長い時間を考えると、開業している今の自分にはかなり努力しないと無理な話であった。

子供たちが小さい時分には、毎年裏洞爺の秘密の湖岸に行き、テントを張って湖の流木を集め焚火を楽しんでいたが、湖の国立公園内であると思うと小さな焚火しか創らなかった。

学生時代に創った焚火は大きかった。特に私が一年目の夏合宿で入った六ノ沢出合での焚火は大きかった。

静内川の上流であるサッシビチャリ川を遡行し、ヤオロマップ岳、コイカクシュサツナイ岳を経て、札内川上流に出たのは入山してから5日目であった。

朝から登ってきたこの沢は、親子と思われる熊の足跡が六ノ沢に向って続いており、私たち3人のパーティーはその恐怖に負けまいと大声を張り上げて登ってきたのだ。そして六ノ沢の出合の大きなトド松の下にその日の寝ぐらを決めた。熊避けの焚火を創る為、日没までのほとんどをかけてそこらじゅうの流木を集めて積んでいった。薪は小山のように大きくなった、だが、一晚中燃やすには充分でないと思われた。3人は汗をかきながら必死になって流木を集めた。

いつしか、熊への恐怖は流木を集めることに集中するあまり、巨大な焚火を創ることに転化し、それを創ることが目的に変わった。人工衛星から見える焚火を創ろう、と3人は本気で思った。

そして、その焚火は、ゴオーと高く高く燃え上がり、紅蓮の炎は日高の沢尾根を映し出した。沢の音と焚火の燃え盛る音だけが、そこにはあった。そして、私たちはしあわせであった。

翌日、六ノ沢を遡行し、十勝幌尻岳の山頂に出た。日高の主稜線が南北に連なり、夏の稜線はハイマツと高山植物のにおいがあふれていた。

ピリカペタン沢をかけるように下りていった。途中の出合で札幌山岳会のパーティーがテントを張っていた。医学部の中野君がその中にいて、お茶を入れてもらった。小さな焚火であったが居心地の良い所でひとときの山話をして、私たちはトツタベツ川を経て札幌へ帰った。

中野君はしばらくして山を止めた。

札幌山岳会はアラスカのマッキンレー峰で遭難

し、あのテントの中に居たパーティーは中野君を残して全員帰らなかった。

15年前の夏、私が言いだしっべとなり、日高の沢登りに行こうということになった。お盆休みを利用し2泊3日で登って、日高らしさを楽しめて、日高山脈の主稜線も見えて、焚火もできて、五十路の私でも登れる所、と考えたら、ピリカペタン沢が手頃ということになった。

山の会の後輩である、カメ、まっちゃん、岡やん、私の長男、そして私の5人で行くことになった。

日高町で落ち合い2台の車で十勝平野をつっぱしり、ピリカペタン沢に入った。

念願の日高の沢の焚火だ、日の高いうちから流木集めをして、いよいよ火を入れた。パチパチと燃え上がり、紫煙はわずかな川風によって川下に流れていき、木々の濃緑に溶けていった。

この日は、岩登りの聖地小樽の赤岩で、若き命を散らした宮下の命日であった。彼のお父さんから送られた三岳を飲みながら、彼との楽しかったことなどを話し、紫紺の闇は更けていった。

突然、カメが、宮下！と叫んだ。

宮下いるか！ あいつは居る、今ここにきているよ。

宮下！ ここに来て飲もう！

カメの叫びは、焚火に照らされた川面を渡っていき、暗い沢音に消えていった。

カメは相当に酔って、テントに帰る河原で何度も転びながら、彼の名を呼んだ。

翌日の沢登りは大変であった。脚も、膝も、心臓も、心を除いてすべてが苦しかった。

身の衰え故に苦しかったが、グングン高度を上げる醍醐味と、日高の稜線においては、あざやかに三十年前の若かりし自分が感じたものと同じであった。

おわり

追記

古希を超えたので、いよいよ終活の準備をしようとして本棚の断捨離を行っていたところ、本の中に本文の元原稿が出てきました。15年前にフラテ山の会の部誌に投稿した文で、懐かしくなり、その場に坐り込んで読みだしました。ちょうどこの頃北海道医報からねずみ年生まれにつき、何か書くようにとの依頼があったので、山の会向けの元原稿を一般読者向に改変加筆し、本文をしたためた次第です。

現在、私は外洋ヨットレースにはまり、ロサンゼルス沖をスタートしホノルル沖をゴールとする、トランスパシフィック・ヨットレース(約2,200マイル)に出ようと準備中です。

あこがれなくして、我人生なし。

みなさん、魑魅魍魎なる大虎猫に踏みつけられないよう注意して生きましょう。注、注、チュウ。